

各月掲載になりました、坂井先生の「わかるように伝えていますか」今回で94回目！

今回は少し難しく「なぜ特別支援教育に情報端末なのか？」と言う事を詳しく書いて頂いております。 久田

第94回『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聡

なぜ、特別支援教育に情報端末なのか？

学校の教育課程の中に情報端末などのICT機器を導入しようと思っても、なかなか学校の了解を得ることができないという話を聞きます。なぜ、そんなことになるのでしょうか？ そのような場合には、正攻法で根拠を示しながら、管理職等の理解を得ることが重要です。その根拠となるものを紹介しておきましょう。

文部科学省は、5年も前になる2011年4月に「教育の情報化ビジョン」を公表しています。「教育の情報化ビジョン」というのは、情報通信技術を最大限に活用した21世紀にふさわしい学びと学校が求められることを受けて、初等中等教育段階の情報化に関する総合的な推進方策について検討した結果をまとめているものです。このなかで、特別支援教育の領域においても、その活用について触れられています。それは、第1章の第2項「教育の情報化が果たす役割」の中にあります。そこでは次のように述べられています。

「特別支援学校や小学校・中学校の特別支援学級に在籍したり、通級による指導を受けたりする子どものほか、通常学級に在籍する発達障害のある子ども等、特別な支援を必要とする子どもたちにとって、情報通信技術は障害の状態や特性等に応じて活用することにより、各教科や自立活動等の指導において、その効果を高めることができる点で極めて有用である。特に情報の収集・編集・表現・発信等コミュニケーション手段としての活用が期待される。」

このように、特別な支援を必要とする子どもの発達や気質の特性等に応じて情報通信技術を活用することが学習効果を高める点で極めて有用だとされているのです。これまでの様々な取り組みの結果が反映されているということでしょう。ここで忘れてはならないのは、障害のある子どもの障害そのものを情報通信技術で克服・改善するということではなく、その発達や気質の特性による学習上、生活上の困難を情報通信技術の活用により克服・改善するという視点だということです。

このように、情報通信技術に大きな期待が寄せられている背景には、情報通信技術の存在が身近なものとして生活の中に浸透してきていることが挙げられます。

情報通信技術は、一般的にはICTと表記される。情報通信技術を意味する Information and Communications Technology の大文字の部分だけを取り出して表記したものです。

総務省が公表した平成26年度版情報通信白書によると、インターネットの普及率は82.8%と示されています。それを年代別に見てみると、6～12歳では73.3%、13～19歳では97.9%、20～29歳では98.5%となっています。これらの数値からわかることは、学校で学ぶ世代の多くがインターネットを利用しているという事実なのです。また、ICTの代表格である情報通信機器の普及状況を見てみると、携帯電話が94.8%、パソコンが81.7%となっています。携帯電話のなかでもスマートフォンは、62.6%となっており、前年度に比べると13.1ポイント大幅に増加しているのです。この数値は、急速に普及が進んでいることを示しています。このように情報通信機器は発達障害のある子どもたちにとっても身近な道具として、生活の中に浸透してきているということがいえるのです。このような背景も考えたとき、教育的に効果のあるとされている情報端末などの機器を使用しない手はないのです。今後も普及が予想される情報端末機器等を効果的に使っていく一つの根拠がこのようなものであるということです。

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里） クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会） 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など